
苦痛

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

苦痛

【Nコード】

N4989L

【作者名】

ごはんライス

【あらすじ】

20枚。天使のおっさんとたけしとロリ華とジョニーのお話。河野夜兎先生とぴいすけ先生、ごめんなさい。

苦しい。なんだこの胸をかきむしられるような感じ。むかついて街で包丁を振り回しそう。わからない。わからない。ひたすら苦しい。たけしはそれが恋だと気づかない。仕事が忙しくて最近恋をしてないからだ。

たけしはイライラしてパチンコに行った。全然、玉が出ない。むかついて台をどんと蹴飛ばした。「いつてええええええ」

「お客様。困ります。台が壊れてしまします」

「やかましい。慰謝料払え。足、骨折したぞ。痛い。痛い」

店長は困り果て、奥からマッチョな黒人二人を呼んだ。

「やっちまいな」

「イエッサー」

袋叩きにされ、店から放り投げられるたけし。

「うう。なんてこったい」

たけしはとぼとぼと歩き始めた。まだ胸が苦しい。いったい何なんだ。忌々しい。オレがいつたい何をやっただっちゅうんだ。真面目に生きてるのに。

なぜか、ロリ華の住んでるアパートの前に来ていた。

「ああ。ロリ華のやつ、もう寝てるんだ。電気切れてる」

たけしは煙草に火をつける。オレは何しに来たんだ。

しばらくぼうつとロリ華の部屋の窓を眺める。

「ああ。また胸が苦しくなってきた。ちきしょう。ちきしょう」

たけしは、うわああああと叫び走り出した。走っていれば苦しみが紛れるかもしれない。

疲れて立ち止まった。

「はあはあはあ」

結局疲れただけだった。胸の苦しみは全然取れていない。

「どうしたらいいんだ」

途方に暮れるたけし。

すると向こうから妙な歩き方をするおっさんがやって来た。変な歌を歌ってる。

「恋は恋でも鯉じゃない。うれしはずかし昭和の香りい」

おっさんはひどく太っていた。しかもすっぱだかで、あそこにはモザイクがかかっている。頭の上には輪っかが浮いており、背中から白い翼を生やしてる。

おっさんはたけしの前に立ち止まった。

「なんなんや。おっさん」

「よくぞ聞いてくれますた。わたすが天使のおじさんです。うほほほはい」

「はあ？」

たけしは怪訝そうな顔をしてる。

おっさんはたけしの腹をひじでぐいぐい押す。

「わかってるって。わかってるって。お前、好きな子がいるんだろ
う」

「は？知らねえよ。いねえよ」

「でも胸は苦しいだろ？」

「う、うん」

たけしは、なんでこのおっさん、んなこと知ってんだろうと不思議に思う。

「任せとけ。任せとけ。おっさんがお前とロリ華、くっつけちゃう。
むっひっひっひ」

なんでロリ華のこと知ってやがるんだ。

「別にいいよ。オレ、ロリ華のこと好きじゃねえし」

「自分の心に素直になれ！」

おっさんが急に大声で怒鳴ったので、たけしはわたわたした。

「お前はロリ華にぞっこんなんだ！そう国会で可決されたんだ！」

たけしはうなだれる。そこまで言われるならしょうがない。オレはロリ華のことが好きなのであろう。

「んじゃあ。オレはどうすりゃいいんだよ」

「むっひっひ。わしの言う通りにしろ。もし逆らったらおっちゃん
グーでお前を殴るぞ。わかったか？」

「わ、わかったよう」

なぜか天使のおっさんは家までついてきた。

「まさか、おっさん。泊まるつもりじゃ」

「当たり前だ。この計画は長期戦になる。十分に作戦を練らないと。
おい。腹へった。飯作れ」

「オレ作らないよ。いつもコンビニ弁当だもん」

「ふん。そんなら出前とれ。うなぎの特重だ」

「そんなの贅沢だよ」

「バカ野郎！この作戦が成功すれば毎日ロリ華の手料理が食べられ
るんだぞ。安いもんじゃねえか」

おっさんは数日ごろごろして、テレビ見たり飯食ったり風呂入っ
たりしてるだけ。作戦とやらを練ろうともしない。完全にだまされ
てる。ただのホームレスのおっさんや。

2（前書き）

残酷な描写が少しあります。

そうこうしてる間にますます胸が苦しくなる。胃も痛くなってきた。というのは検察庁に呼ばれたのだ。原付の無保険運転の件で出向した。

天使のおっさんに聞いたところによると、役所というのは性格がねちねちしてるので、反抗的な態度をとると懲役にさせられるらしい。罰金で済ますには、「お代官さまへへへ」という感じで下に下に態度をとらねばならぬというのだ。決して、役人が面白い顔をしていても笑ってはいけないと。

捜査官室。

「ほう。たけしさん。あなた、一旦停止違反とかいろいろやってるわねえ」

や、やばい。捜査官、志村けんに顔がそっくり。しかも、女性！！！。オレはずっと下を向いていた。顔を絶対に合わせてはならぬ。

しかし、ずっと下を向いてると不審がられると思い、オレは顔を上げた。

「だっふんだ！！」

思わずそう叫びたくなった。しかし、天使のおっさんに言われたことを思い出し、ぐっと我慢我慢我慢我慢。

「じゃあ、そういうわけで、罰金500万円ね。略式裁判でことでまだ金額は確定ではないけど、それくらい盗られると思います」

「ええええええええええええ」

オレは目ん玉が五メートルくらい飛び出た。捜査官のおばはんがさつとよけた。

オレは月収13万円である。ちょ、懲役、けつてーーーーい。

オレがうなだれていると、ドアが開いた。

「て、天使のおっさん！」

「任せておけ」

「な、なに。あなた。ふ、ふ、ふりちんで、精神異常者ね」

「やかましい。志村けん」

天使のおっさんは持っていた金属バットで、志村けんの頭を叩いた。
「ぐげ」

目ん玉が飛び出した。

そして、志村けんを立たせたあと、持ち上げ、床に叩きつけた。

「うぎゃあああああああああああ」

そして、腹を何回も何回も蹴飛ばした。肋骨は完全に折れているであらう。

極めつけは失神した志村けんに向かって、しゃあああとシヨンベンをしたのだ。

「はっはっはは。爽快。爽快」

「ちょ、ちょっとやりすぎじゃ」

「なんだ。こいつむかつくだろう」

「でも悪いのはぼくだから」

「関係ねえ。おい。たけし。逃げるぞ」

「う、うん」

オレたちが捜査官室を出たあと、加藤茶にそっくりな職員が中に入り悲鳴をあげていた。

「はははっおもしろ」

「うん。ちょっと気分がすっきりしたよ。うけけけけ」

ただ、結局は懲役になった。当たり前だ。

ざああああああ

雨が降る。雨の野郎はマジで腹が立つ。来いと言ってもないのに来やがる。常識のないやつだ。

刑務所から帰って以来、オレは元気が出ない。天使のおっさんは相変わらず仕事もせずぴこぴこゲームなどしてる。オレはコーヒーを飲みながらぼんやり考える。

なぜロリ華は去ってしまったのだろう。刑務所から出て真人間になりオレは思い切ってロリ華に告白した。すると運よくオッケーが出て幸せな有頂天な日々が続いた。

しかし、ロリ華は去った。

オレがひどいことを言ったからか。彼女はオレに「たけしさんて優しくてステキ」と言うのでオレはキレてしまった。低賃金重労働の非正規労働の苦痛がたまりにたまっていて「わかったふりをするな！」と怒鳴ってしまったのだ。彼女は正社員である。八つ当たりをしたのだ。

翌日謝ろうと思って彼女のアパートへ行ったらドアが開いていて、おかしいなと思って中に入ったら何もなかった。もぬけの殻であった。

テレビもベッドもテーブルもタンスもすべて消えていた。

オレはわたふたする。なぜ。どうして。

オレは昔のことを思い出す。昔つき合っていた彼女とある日喧嘩して「非正規なんか人間のくずよ！」と言われた。それがあまりにつらくオレは彼女に何も言わずアパートを引き払い、彼女から去った。同じことが起こっている。オレは頭が混乱してきた。

ざああああああ。

窓の外の雨を眺めながら自業自得かあとため息をつく。

まるでやる気が出ない。仕事に行く気もしないし、趣味の絵を描く

気にもならない。ロリ華の絵を描くのが楽しかったただけなのだ。
いつの間にか、天使のおっさんがオレの肩を叩いている。

「わし、ロリ華のいるとこ知ってるぜ」

「ええっ」

ざあああああああ。

雨の中、原付で飛ばす。天使のおっさんはゴーグルを装着し、翼をばたばたさせながら後ろから飛んでくる。雨に濡れながらでつぶりしたボディが揺れる。早く。早くロリ華に会いたい。

急ぎすぎて途中、野良犬や野良猫をはねるが気にしちゃおれない。

「わおーん」

ケーキ屋が見えてきた。

「あそこでロリ華、働いてるぜ。不況の影響でリストラされて、今、ケーキ屋でアルバイトしてんだ」

オレはケーキ屋の前に原付を止めた。

からんころん。

「おばあちゃん。はい。キムチケーキ」

「ほっほっほ。これ辛くて最高なんだよねえ。ほっほっほ」

「味覚おかしいわね。ボケてるの？」

ああ。ロリ華だ。ロリ華がいる。

オレはロリ華に歩み寄った。

「や、やあ。ロリ華」

「げ。たけしさん」

沈黙。

「あの。その。元気？」

「ええ。まあ。元気よ。たけしさんは」

「う、うん。まあ。元気だよ」

大うそをこいた。

ざああああああああああああああ。

「あの。その。ええと」

「うん。あの。まあ。その」

何だかお互いに国会答弁みたいになってる。

しかし、きちんとここは言わねばならない。オレはロリ華がいない

と生きていけないのだ。

「ロリ華。オレといっしょに暮らそう」「

「ええと。そのう」

ああ。やっぱりロリ華、遠慮してる。オレがまだ怒ってると思ってんだ。ここはロリ華の気持ちを解きほぐしてあげなきゃいけない。男として。

「オレもう怒ってないさ。本当だぜ？ だから気にしなくていいんだよ。オレといっしょに暮らそう」

「そのひ」

「オオイ。ロリ華あ」

「あ。ジョニーさん」

「誰ダ、コイツ」

奥から二メートルくらいある黒人がやって来た。こ、怖い。

「ロリ華。コノ男ハ？」

「元カレ」

え。元カレ????

「ロリ華。この男性は？」

「うん。パテシエのジョニーさん」

オレは思い切って聞いてみた。

「まさか付き合ってるとかそういうことはないよね？」

「付き合ってるよ。今、あたしジョニーさんと同棲してんだ」

⋮

天使のおっさんがやにやしてる。何だこいつ。知ってやがったのか。

「あの。それはそのう。状況がよく飲み込めない」

オレは完全に頭がパニック。頭でちびっこたちがぎゃあぎゃあ走り回ってる。

「あの。ええと。オレといっしょに暮らすことは」

「何であなたといっしょに暮らさないとイケないの」

「ナンダ。ロリ華。コイツ、すとーかーカ」

部屋に戻り、シャワーを浴びたあと、オレは天使のおっさんに怒鳴った。雨がうそのように止みめっちゃいい天気になってるのも実にいいましい。オレの心は雨でざあざあだというのに！

「おっちゃん！どういうことだよ！聞いてないよ！」

天使のおっさんはちんちんをかきながら、にやにや笑ってる。

「だって聞かれなかったもん」

「大恥こいたよ！」

すると、天使のおっさんの目つきが急にマジになった。

「大恥だと？」

「う。そ、そうだよ。恥をかいたじゃないか」

天使のおっさんはグーでオレを殴った。

オレは数メートル後方にぶっ飛び、壁に頭を思い切り打ち付けた。

「ぐはっ」

「恥とかそういう問題じゃねえだろ！お前はロリ華といっしょに暮らしたくないのか！」

「く、暮らしたいよう。そりゃあ」

「じゃあ、あの黒人を倒すんだ！」

「ええっ」

オレはブルった。あ、あの二メートルもある黒人と?????

おっさんはちんちんかきながらにやにや笑ってる。絶対、こいつオレがボコされるのを見たいんだ。

「む、無理だよ。負けるよう」

「ばーか。腕力で戦うんじゃないよ。これを見な」

「ん」

天使のおっさんが紙切れを渡した。

「町内お菓子作り大会??？」

「そうさ」

見れば、うちの町内でお菓子作り大会というイベントを近日やるらしい。

「ロリ華のケーキ屋も町内にあるだろう。てことは、あの黒人パテシエも出るはずさ。プロアマ問わずと書いてあるから」

「そうか。ここで対決するのか」

「しかも見てごらん。優勝者にペアで海外旅行だぜ。勝ってロリ華と行けばいいじゃないか」

「そうか！ありがとう！天使のおっさん！」

「そうと決まれば今すぐ特訓だ。イエーイ」
「イエーイ」

オレたちはハイタッチした。

海外旅行がバクダッド4泊5日だったことなんて全然眼中になかった。とにかく、ロリ華をこの手に戻さなければいけないのだ！！！！

オレはしかししばらく、夜がなかなか眠られなかった。

「うーん河野さーん。河野さーん」

なんだかようわからんが、天使のおっさんもうめいてる。誰やねん、河野って。

オレの場合は、黒人パティエジョニーとロリ華が裸でいろいろしてるところを夢で見えてしまい、怒り嫉妬でもうわなわなして眠るに眠れない。しかもロリ華が気持ちよさそうなので実に怒りが怒りがノンストップ。少年誌なので細かくは描写できない。しかし、オレは女子とセックスをしたことがないので、夢のそれはポルノタッチであり、実際にやらしくますます腹が立つ。

「いかん！ 気が狂いそうだ！」

オレは起き上がった。

「あー河野さーん。行かないでー」

誰やねん河野河野やかましいな！

オレは天使のおっさんを踏んづけて、洗面所に行って顔を洗ってうがいをした。

「うーむ。白髪が増えたなあ」

鏡を見ながらため息が出る。悪い夢を観るようになってから、白髪が急激に増え、ブラックジャックみたいになってる。

「これは何としても大会でジョニーを打ちのめさないといけない」翌日、バイトが終わったあと、オレは天使のおっさんといっしょに山へ登り、滝に打たれたり、川で特訓した。どんな特訓かといえば、夕方の暗がりのなか、オレは川の真中に立つ。天使のおっさんが「おい。たけしー行くぞー」と声をかける。「いいよー。こーい」上流から丸太を次々と流し、ものすごい勢いで流れてくる巨大な丸太をオレが次々によけていくという実に危険な特訓だ。丸太が顔をかすめ、血がつーと出たりする。丸太を全身で受ければ即死だ

ろう。しかし、これもロリ華を得るためだ。怖くない。

一度、天使のおっさんに「こんなのお菓子作りに役に立つの？」と聞いたことがある。

天使のおっさんは「バカヤロウ。どんな仕事も体力勝負だ。体力をつけるのが基本なんだ。これくらいやるのが当然だ！」と怒鳴る。

そうか。そうだな。お菓子作りってかわいいイメージがあるけど、職人はいろいろ苦労しとるのだ。

しかし、小さいちんちんかきながらでつぶりした腹を叩いてニヤニヤしてるおっさんを見ると、こいつオレが危険な目にあってるのを楽しんでるんじゃないか、という気も少しする。

ロリ華とジョニーは腕を組んで散歩をしていた。

「ジョニー。今度のお菓子作り大会、何を作るの？」

「ウーン。わてノ得意ナ、牛そぼろケーキデモ作ロウカネエ」

「ステキ！絶対優勝してよ。ロリ華、海外旅行行きたーい」

「任せトケ」

ロリ華はジョニーといっしょになれて嬉しいなあと思う。優しいしケーキ作るのが上手いし夜の方も。。おっと、これは少年誌だからそこは詳しくしゃべっちゃだめね。

そういえば。

この前店に来てたたけしさん。たけしさんも優しかったなあ。でも非正規労働者だからなあ。将来があまりないのよねえ。

ロリ華とジョニーはベンチに座り、キスをした。ちびっこたちがひゅーひゅーと囃したてる。

その頃、天使のおっさんとたけしは、スペインで何百頭の闘牛に追い掛け回されていた。

「うわーおっちゃんーん。こんなことしてお菓子作り大会に優勝できるのかよーーー」

「あほーーー。お菓子作りは体力勝負やーーうわあああ。たけしー早く逃げろーーー」

「うわあああああああああああ」

とまたある日。ロリ華とジョニーは街のオープンカフェで、一つのレモンシユカツシユに二つストローを刺しちゅーちゅー吸っている。「ああ。あたし幸せだなあ。ちゅーちゅー。暖かい日差し。優しい彼氏。おいしいレモンスカツシユ。ちゅーちゅー」

「わてモサー。カワイイ彼女。充実シタけーき作り。オイシーれもんしゅかつしゅ。最高。チューチュー」

周りの客がひゅーひゅーと囃したてる。

その頃、天使のおっさんとたけしは、谷底から五十メートル地点にある吊り橋を渡っていた。

「こ、怖ええ。この吊り橋。ぐらぐらしてる。腐ってんじゃないの！」

「下を見るなよたけし。見たら動けなくなるぞ！」

「あ。見ちゃった」

深い闇にたけしが驚いてわちゃわちゃしてしまったため、橋がぐらぐら揺れ、たけしはバランスを崩し落ちてしまった。天使のおっさんはすかさず翼をばたばたさせ飛んだ。

「うわああああああああああああああ」

まるで下降線を辿る日本経済のよう！

「きゃあああああああ」

おじいさんとおばあさんがちゃぶ台で食事をとっていた。その上を丸太にまたがり猛スピードで飛んで行くオレとおっさん。おっさんは笑顔で手を振り、オレはぺこぺことお辞儀する。

「な、なんじゃあれ」

「UFOじゃ」

民家を突き破り外へ出る。

ああ。こんなことしていると大会に出る前にまた逮捕されてしまう。案の定、オレたちの丸太をパトカーが追いかけた。

「止まりなさい。その丸太。スピード違反です。止まりなさい」
止まれればとづくに止まってるよー！ー！！！！

「これはいかん。自衛隊に電話しろ」

「あいさ！」

そのうち、自衛隊の戦闘機が飛んできた。

「お。あの丸太を止めればいいんだな。よし狙いを定めろ」

「あいよ！」

戦闘機から爆弾が落ちてきた。

しかし、自衛隊は実戦経験がない。丸太に全然命中せず、関係ない家とかビルに命中し爆発する。

どおおおおん。

どおおおおん。

「あわわわわわ。えらいことだ」

オレは丸太にまたがりながら変な汗が大量に出てきた。

天使のおっさんはきやつきやつと喜んでる。こいつ、頭おかしいんとちゃうか。

坂道の先に大会の会場が見えてきた。

10（完結）

「優勝はフォアグラケーキを作ったパテシエのジョニーさんです」

「どうも」

「わーステキー」

「ジョニーー……！」

ロリ華はにつこにこだ。あたしの彼氏すごいでしょと胸を張ってる。しかし！

丸太はジョニー向かって突進していく。「うわあああ。なんじゃあれえ」「みんな逃げろおおお」観客は方々に逃げ散った。

たけしは丸太の上から叫んだ。

「うわああああ。ジョニーいいいい。どけえええええええ」

ジョニーは優勝に浮かれていて気づかない。客がないのにまだ手を振ってる。

「ぶつかるうつつうつつうつつ」

丸太がジョニーのボディまであと数十センチ。時速は実に約140キロ。

ロリ華が絶叫。「ジョニーいいいいいいいいいい」

ここからは残酷すぎて少年誌では描写できません。ちびっこの成長に有害な影響を与えるので削除しました。ちなみにさすがのジョニーも即死でした。

たけしと天使のおっさんは結局、刑務所に入った。

「河野さん河野さん」

「ロリ華ああ。ロリ華ああ」

「うるさい……！」

看守は、呆れてる。二人が抱き合って寝てたからだ。暗がりの中、実に不気味だ。

お
し
ま
い

10（完結）（後書き）

20枚は難しいなあ。オレはコントが主体なので、だいたいいつも5枚くらいのはかり書いてる。だから、20枚はオレ的には長い。とはいえ、書いてるとどんどん話が膨らんでく。20枚では足りなくなってくる。お菓子作り大会の様子をもっとおもしろおかしく書きたかったなあと思う。でもそうすると20枚では収まらないからなあ。天使のおっさんが実はたけしの見た幻覚であったという落ちにしたり、ロリ華になじられるシーンも書きたかったができなかった。難しいなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4989/>

苦痛

2010年10月9日07時36分発行